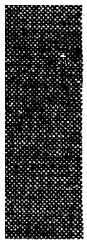
全学バリケードストに突入

駿河台本校も封鎖

大学立法粉砕などかかげ

十七日の学生会臨時学生大会（一部学生自治会＝長善一委員長代行）で大学立法粉砕など六項目要求貫徹のためのスト権を確立した学生会中執は二十一日、記念館で全共闘結成大会を開き全共闘を結成し、駿河台本館をはじめ、全学バリケード封鎖し、無期限ストライキに突入した。これまで十一日の和泉校舎事務室以来駿河台五号館（十四日）、生田農学部校舎（十五日）、駿河台大学院（十七日）、同三号館（短期大学＝十九日）、生田工学部校舎（二十日）と漸時エスカレートしてきたが、二十一日ついに駿河台本館を含む全校舎が封鎖された。この事態に大学当局としては当面休講措置を行なうにとどまり、目下静観中、一方学生側も全共闘を中心とした代表者会議の中で今後の方針をうちたてるものとみられる。（カット上は本校正門前の風景、下は全共闘結成大会）



本校 いつ入るか、いつ入るかといわれていた全学バリケード封鎖がついに現実のものとなった。

全国至る所の大学に紛争の火の手があがり、種々の問題をかかえる本学がいつその火中に投ぜられるかは、〝七〇年安保〟の動ずれと共に、学生運動の動向のカギを握るものとして注目を浴びていた。

封鎖が現実の問題としての様相を帯びはじめたのは四・一二学館機動隊乱入＝無差別逮捕抗議の団交がもたらした記念館をうめつくす一般学生の自然発生的な盛り上りであった。

この盛り上りに対し学生会中執（社学同系）、学苑会中執（解放戦線系）は共に二組織化が先決として、ほとんど同らの具体的な行動への対応も果さなかったことは、本学における学生運動の質をそのまま表わしたものとして一部から批判があっていた。これは、〝五・八幻の学生部封鎖〟にもみられた、大学当局、右翼・機動隊によってではなく、学生の手で「新左翼」他党派の封鎖が四時間をもって終焉しなければならなかったことにもあらわれた。

今月に入り、政府・文部省から出された中教審＝大学立法をその攻撃目標として一時〝小康状態〟にあった学生運動戦線は、再び活力を取り戻し、その中にあって本学の全学封鎖への動きも、全国で一二〇にものぼる紛争校と前後してアップ・テンポで進んできた。

十四日、二文闘（二部文学部闘争委員会＝二部文学部中心＝反帝学評系・ノンセクト）によるスト権確立・駿河台五号館バリケード封鎖がその先鞭をつけた。

これは、反帝学評・ノンセクトなど二部文学部の学生が〝五・八行動委〟を「苦い教訓」として、「合法的」にスト権を確立したもので、期限付き（一週間、その後再度学生大会でバリケードスト継続か否かを決定の予定）とはいえ本格的な封鎖としては、全学最初のものとして、以下の封鎖の呼び水としての効果は見のがせないものとなった。

十七日未明には研究者集団による大学院封鎖、同日の学生大会で全学スト権確立・十九日短大封鎖、と続いて二十一日「全共闘」結成大会、全学バリケード封鎖に至る過程はまさに「天馬空を行く」の勢いであった。

しかし、これに対して大学当局をはじめ、バリケードストに反対し、あくまでも全学投票を呼びかける体育会、民青系学生の動きもあり、さらに各セクト間の調整問題もからみ、今後の方針いかんではあまり楽観もできない情勢にある。